

白先勇作品考察—月光の誘惑—

久下 景子

0.はじめに

白先勇の「台北人シリーズ」⁽¹⁾の〈那片血一般紅的杜鵑花〉は主人公の退役兵士王雄が、召使いとして奉公していた家の一人娘に故郷の大陸の「童養媳」の面影を見るが、娘の成長とともに、その思いが現実に碎かれ、最後に投身自殺をはかってしまうという物語である。その作品に次のような一節がある。引用中の「我」はこの物語の語り手で、王雄の奉公先の娘とは親戚関係にあたる青年で、彼が台湾で義務付けられている兵役で金門島に服役していた時の回想場面である。

有一天晚上巡夜,我在營房外面海濱的岩石上,發覺有一個老兵士在那兒獨個兒坐著拉二胡。那天晚上,月光清亮,沒有甚麼海風,不知他那垂首深思的姿態,還是那十分幽怨的胡琴聲,突然使我聯想到,他那份懷鄉的哀愁,一定也跟古時候戍邊的那些士卒的那樣深、那樣遠。

〈那片血一般紅的杜鵑花〉(p.99) (下線筆者:以下同一)

月の輝く夜に、二胡の音色か或はそれを奏でる老兵の物思いにふける姿が原因か、「我」は老兵の郷愁の念と古代辺境の地を警護していた兵士の思いを結びつける。老兵が海岸で二胡を奏でる姿が月の光に照らされることにより浮かび上がり、静かなムードが醸し出され、老兵の郷愁の念が更に深まっている。あたかもその一瞬時が止まり、月が時空を超えて、遙か彼方の地まで老兵の思いをいざなっているようである。

同じく「台北人シリーズ」の〈遊園驚夢〉の最後の一節に、主人公錢夫人が夜空の月を見上げる場面が描かれている。昔の友人に招かれて、はるばる友人の台北の豪華な邸宅にやってきた錢夫人が、その宴会も終わり、参加していた人々も皆帰路についた後、ふと天を仰ぐと、そこには秋の月がちょうど空高く昇っていた。

錢夫人立在露臺的石欄旁邊,往天上望去,她看見那片秋月恰恰的升到中天,把寶公館花園裏的樹木路階都照得鍍了一層白霜,露臺上那十幾

盆桂花,香氣卻比先前濃了許多,像一陣濕霧似的,一下子罩到了她的面上來。〈遊園驚夢〉p.237

かつて将軍夫人であった錢夫人、出生は卑しかったが将軍の庇護の下、人が羨むほどに榮華をほしいままにしていた。しかし、将軍の死後、台湾の南部でひっそりと暮らしていた。この日、台湾の南部から賑やかな台北へとやってきた彼女は自分の服装から、客人との対話から、改めて以前の榮華が過去のものになっていることを実感する。招待客が一人一人と専用車で見送られていく中、タクシーでやってきた夫人は、「タクシーを呼んでくれ」と言い出せずにボーチにたたずむ。その時、天空を見上げたのである。見上げた空には秋の月がぼっかりと輝いていた。それは恰も天空に君臨し輝きを放つ物体のようであった。彼女はその月を見ながら、皆の前に君臨し輝きを放っていた過去の自分の姿を重ねて見ていたのではないだろうか。

以上の二作品に見られる作中の月の効果は、「郷愁をそそる」「時空を超える」「過去を偲ぶ」というようなものであり、従来から用いられてきた月のモチーフと重なる。文学作品において月は不可欠な永遠のモチーフとして描かれ、生命に限りある人間に対峙した、時空を超越した存在としてとらえられてきた。この研究ノートでは、白先勇の初期の二作品を考察しながら、上記二作品に描かれているのとは異なった月のモチーフを見出すことを目的としている。

1. 〈月夢〉⁽²⁾

白先勇の作品の中で「月」が表題についているのは次の二作である。どちらも短篇小説で、初出は以下のようになっている。

(1) 〈月夢〉 《現代文學》第一期 1960.3

(2) 〈那晚的月光〉⁽³⁾ 《現代文學》第十二期 1962.1

彼の創作の第一篇が正式に雑誌に記載されたのは1958年であるから⁽⁴⁾、両作品とも初期の作品と言える。特に〈月夢〉は、戦後台湾で初めて同性愛をテーマとした作品として最近注目され⁽⁵⁾、白先勇にとっても後の「同志小説」創作につながる記念すべき一篇であったと考えられる。この章では〈月夢〉と関連作品についてみてゆき、次章において〈那晚的月光〉

をとりあげる。

〈月夢〉は、主人公の呉医師が少年の頃、月の素晴らしい夜の湖畔で友人静思と衝動的に性的な交わりをしてしまい、老年になった今でもその記憶から開放されないという物語である。静思はその晩肺炎に罹って亡くなっているのに、呉医師はその死を受け入れることができず、二人の月の夜の湖畔での思い出をいつまでも胸にとどめ、静思に似た人を見つけると、嫌がられるほど付き纏たりしていた。次に挙げるのはその思い出の夜の情景である。少年の白い肌と首からしたたる水滴が絶え間なく腰へと流れ落ちていくのを月光が照らし出し、しなやかな少年の体を夜の闇に浮びあがらせている。更に、少年の肢体だけではなく、その胸元の柔らかな産毛までもが月光のもとに露わにされ、その柔らかさは人に愛しさを感じさせるほどであった。

月光照在那白暫的皮膚上,微微的泛起一層稀薄的青輝,閃著光的水滴不住的從他頸上慢慢的滾下來,那纖細的身腰,那彎著腿的神態,都有一種難以形容的柔美,就在那胸前一轉淡青的汗毛,在月光下看起來,也顯得好軟好細,柔弱得叫人憐惜不已。(p.85)

このような幻想的な夜の湖畔において、呉少年は自分の体の中から湧き起こり、体を駆け巡るある種の衝動を抑えることができなくなる。そして、その最初で最後の出来事が、老年に至った今でも彼に取りつき、彼を時に苦しめ、時に慰める。それは全てあの月の夜の出来事であった。

吳鍾英記得,就在那一個晚上,就在那一剎那,他那股少年的熱情,突地爆發了。當他走到那個纖細的少年身邊,慢慢蹲下去的時候,一股愛意,猛然間他心底噴了上來,一下子流遍全身,使得他的肌肉都不禁起了一陣均勻的波動。他的胸口窩了一團柔得發溶的溫暖,對於躺在地上的那個少年他竟起了一陣說不出的憐愛。(p.p.84-85)

湖水の辺の若くしなやかな少年の肉体、そしてそれを照らし出す月光という、見事に演出された場面において、呉少年の中に潜むもう一人の自分が目覚め、衝動に走ってしまったと考えられる。月光には少年の心に強く働きかける一つの不可思議な力があると言える。

この夜の湖水での情事という場面設定は後の作品〈Tea for Two〉⁽⁶⁾でもほぼ類似の一節が見られる。この作品は大偉と東尼の男性同性愛者

を中心とした物語で、彼等が経営する喫茶店に集ってくる何組かの同性愛カップルについて語られている。舞台はアメリカで、大偉はアメリカ人、東尼は渡米中国人という異色のカップルである。そこで結ばれている同性愛カップルが国際色豊かである点は〈月夢〉とは異なる。東尼と大偉のカップルは最後に東尼がリ्यूマチにかかり、献身的な介護をしていた大偉もエイズを発病するという悲劇におちいる。その詳細はここでは割愛するが、二人の少年時代の「第一次」は次のように語られている。

大偉繼續興致勃勃的描述他和東尼的「第一次」。他說那晚他和東尼藉故出去小便,爬出帳篷兩人連跑帶跳穿過一片野杉林,飛奔到湖邊去。

「那天晚上月光很亮———」

「沒有月光,只有星星!」東尼指正大偉。

「星星也很亮,把湖水都照亮了。」大偉不為所動繼續說下去,「我們兩人就在湖邊的草地上,脫得精光——嘍,我敢說,那晚整個湖都在翻騰呢!」〈Tea for Two〉(p.112)

夏のキャンプに出かけた二人の少年はトイレに行くと言いついて、テントを抜け出し、湖畔へと駆けて行く。「あの夜は月明かりがきれいだった」という大偉に、東尼は「月明かりはなかったよ。星だけだった」と反論するものも、月光であれ、星であれ、二人がたどり着いた湖の湖面はキラキラと照らされ、二人の「蜜月」を見事に演出してくれたのである。ここでも、二人の少年が湖の辺で衝動に任せる姿が描かれている。〈月夢〉発表から43年後の作品において、湖畔で繰り広げられる少年の情事が再び描かれていることは、この情景が作者白先勇にとって、何らかの印象深いもの、或いは同性愛者の交わりにおいて理想的な情景であると認識していることに疑いない。

〈月夢〉に話をもどすと、少年静思の月光の下での描写は、彼の肢体から胸元と、人物がどんどん浮かび上がるように描かれている。この胸元を照らす月光という設定は〈月夢〉の別の箇所でもみられる。次の引用は病院から救急で呼び出された呉医師が肺炎で助けることのできなかった孤児の少年を病院の霊安室に見舞った時の様子である。

稀薄的月亮從窗外滑進來了,落在少年的身上。他的臉是雪白的,眉根

的輪廓仍然十分清秀，嘴唇微微帶著淺紫，柔和得很，好平靜，一點也沒有痛苦的痕跡。吳醫生輕輕的將他的衣服脫去，月光下，那個少年的身體顯得纖細極了。吳醫生很小心的用手在那雪白的面腮上撫摸了一下，然後慢慢在床頭跪了下來，將臉偎在那映著青光的胸口上。(p.89)

ほのかな月光が窓から少年の体へと伸びてきて、少年の顔を眉から口元へと詳細に映し出す。ここでも、月光によって視点がどんどん少年に引き寄せられている。呉医師は少年の顔が柔和、平靜で、少しも苦しみの跡がないことを目にする。そして、少年の衣服を取り去った後、ほっそりとした少年の肉体を目の当たりにし、最後にゆっくりとベッドの枕下に跪き、青白く光る少年の胸元に顔を当てる。月の光は少年の遺体を全面に照らし出すと共に、その中でも、特に彼の胸元に青白い輝きを残している。その表現はまるでその場所(胸元)がまだ生きる可能性をひめているようでもあり、反対に最後の輝きの残光のようでもある。この胸元を照らす月の青白い光は白先勇の他の作品でも描かれている。「台北人シリーズ」中の〈金大班の最後一夜〉という作品は水商売の元ダンサー金大班が明日は陳老板と結婚して、ダンスホールを離れるという最後の夜を描いたものである。金大班はその最後の夜にホールでダンスが踊れない若い男性客をみて、かつて自分が若かりし頃の恋人月如との甘い一夜を思い出す。その思い出は次のようである。

可是那晚當月如睡熟了以後，她爬了起來，跪在床邊，藉著月光，痴痴的看著床上那個赤裸的男人。月光照到了他青白的胸膛和纖秀的腰肢上，她好像頭一次真正看到了一個赤裸的男體一般，那一刻她才了悟原來一個女人對一個男人的肉體，竟也會那樣發狂般的痴戀起來的。

〈金大班の最後一夜〉(p.p.89-90)

月明りをたよりに、相手の男性を凝視した彼女は、その光に照らされた青白い胸としなやかな腰に、初めて本当の男性の裸体を見たような気さえし、女性も男性の肉体に対して恋焦がれ夢中になることがあるのだと気づく。ここで、彼女を強く魅了したものとして、青白い胸が描かれている。同性同士だけではなく、異性間においても、月に照らし出された青白い胸は魅惑的に取り扱われている。別な見方をすれば、白先勇の作品においては、横たわった肢体において、月光が照らし出すその第一の部

位として顔面よりも胸が強調されていると言える。身体において胸が強調されるというのは、白先勇の長篇小説《孽子》⁽⁷⁾において、「心をかえしてほしいんだったら、この胸をえぐれ」という阿鳳の台詞があるように、人間の心の存在する場所として特別な意味を持たせているような気がする。

以上、初期作品〈月夢〉と関連作品を引用しながら述べてきた。〈月夢〉で描かれている月は少年を誘惑し、少年に衝動的な行いをさせてしまう静寂でありながら、誘惑的な月であった。そして、その月光に照らされる少年は、いずれも白くしなやかな肢体を持ち、それは『ヴェニスに死す』でアッシェンバッハが老年にして恋焦がれたタッジオを連想させる人物像でもあった。

2. 〈那晩的月光〉

次に〈那晩的月光〉についてみる。この作品は日頃クラスメートから「聖人」と呼ばれていた大学生李飛雲が月の綺麗な夜に余燕翼の「好きよ」という一言に道を誤ってしまう物語である。卒業したらアメリカに留学するという入学当初からの大志は、一夜のランデブーにより李飛雲を未婚の父へと変貌させてしまう。大志を抱いて共に入学した同級生は卒業を間近にそれぞれ未来ある道を歩もうとしているのに、彼は身ごもった余燕翼を見捨てることができず、アルバイトに明けくれ、夢を断念する。その彼を感わした夜の情景は次に引用したようなものである。

「我跟你說,李飛雲,我喜歡你」余燕翼那晚在李飛雲的耳根下,輕輕的,輕得差不多聽不見聲音說道。就在那一刻,李飛雲第一次發覺余燕翼可愛,大概那夜月光特別清亮,大概余燕翼那襲敞領的藍綢裙子格外迷人。李飛雲看到余燕翼渾圓的項背,露在月光下泛著一層青白的光輝。他摟住余燕翼的腰,將臉偎到她的項背上去。〈那晩的月亮〉(p.222) 那晩的月光實在太美了。李飛雲想到,地上好像浮了一層湖水似的。陳錫麟不能怪我,他想,陳錫麟沒有看過那麼清亮的月光-----可是陳錫麟是對的,陳錫麟的話總是對的。

〈同上〉(p.p.231-232)

「たぶん、あの晩の月の光は特別に輝いていたのだ」とあるように、月

光が彼の心を惑わし、「彼女のふっくらとした項が、月光の下で青白い輝きを浴び」、彼は彼女の腰を抱き寄せ、顔をその項にうずめてしまう。物語中、李飛雲は「那晚的月亮实在太美了。」(あの晩の月は全く綺麗だったなあ)という言葉の繰り返す。その月光は地面を湖水のように浮び上がらせていた。それは、そんな月光の下では誰だって衝動的になってしまうという自己弁護のようでさえある。彼の名前「飛雲」(雲が飛ぶ)のごとく将来の夢が去っていったと暗示している。

月光に照らされた女性の項に思わず衝動に走ってしまうという話は〈火島之行〉⁽⁸⁾でも見られる。ニューヨークの大学を卒業しアメリカで悠々自適な生活を送っている林剛は女子留学生の間では「林媽媽」(林ママ)と呼ばれ、渡米してきた留学生の面倒を甲斐甲斐しくみている。次の場面はあるダンスパーティに旧友黄玖と参加し、湖水の辺で休憩している時のことである。

當黃玖蹲在湖邊,低首用手去撥弄湖水時,月光照得她豐滿的背項如同潑乳一般,林剛突然發覺黃玖竟然有一股不可抗拒的誘力,他忘情的攬著黃玖的腰,在黃玖頸背上親了一下。

〈火島之行〉(p.287)

女性たちから人畜無害と見なされていた林剛も黄玖の「月光に照らされてミルクを撒き散らしたかのよう」な項に抵抗できない魅力を感じ、思わずその腰を引き寄せ、その項に接吻してしまう。彼のこの行動は黄玖からジョークとして取り扱われ、この物語では二人の関係にその後の発展はみられない。前者は卒業を控えた大学生で、後者は社会で活躍している成人男性であるが、月光に照らされた女性の項に同じように性的な衝動に走るさまは酷似している。女性の身体の魅力的な箇所として「項」があげられ、そこに月光が照らされることにより更に魅力が増し、日頃、「聖人」「林ママ」とまで呼ばれていた青年、男性を惑わし、性的な行動を起こさせていると言える。

〈月夢〉では主に月光と少年の関係について述べたが、以上をみると、男性だけではなく女性にも月光に照らされることにより、他者を性的衝動に駆り立たせる魅力が増すことがわかる。つまり、月光は性別に関係なく照らし出された人を魅力的にし、他者に衝動的な行動を起こさせる

不思議な力を秘めていると考えられる。

3. 赤い月

これまで〈月夢〉、〈那晚的月光〉と言及し、月が性別を問わず人を魅了すると述べてきたが、実は〈月夢〉には前述の月とはいささか異なる月、前者を「青白い月」とすれば「赤い月」が描かれている。ここでは、その「赤い月」について付け加えておきたい。呉医師が従軍医師としてインドに行っていた時のエピソードとして、酔っ払った彼を同僚が安い娼婦宿へ連れて行くという場面がある。そこで、泥酔した彼は土地の女性と一夜を明かすことになるが、その女性を照らし出したのが「肉紅」(赤い)の月光であった。

窗外正懸著一個又扁又大的月亮,肉紅色的月光,懶洋洋的爬進窗子裡來,照在那個女人的身上。她張著嘴,呲著一口白牙在打呼,全身都是黑得發亮的,兩個軟蠕蠕的奶子卻垂到了他的胸上,他聞到了她腋窩和頭髮裡發出來的汗臭。〈月夢〉(p.86)

赤い月の光が物憂さそうに窓から入ってきて、その女性の体を照らし出す。その光に照らし出された女性は口をあけて、鼾をかき、全身黒光りしているばかりではなく、脇や髪から汗のにおいをただよわせていた。この現実少年の日の甘い思い出を持つ呉医師を絶望させるものであった。その後、呉医師は二度と女性とベッドを共にすることができなくなった。その一夜が彼にとっていかに不愉快な思い出であったか、赤い月に照らされた女性の肢体がいかに醜く彼の脳裏に焼きついてしまったことだろうか。

次の引用は「台北人シリーズ」の〈孤恋花〉からである。〈孤恋花〉は水商売の女性同性愛者の物語で、ここでは詳しいストーリーは割愛するが、この語りの女性「我」が面倒をみている若い女性娟娟は前科のある凶暴な客に付き纏われ、果てには薬漬けにされてしまう。語りの「我」が中元節の儀式を終えた晩、娟娟がキセルで相手の男の頭を割って殺してしまうという悲惨な事件が起きる。この赤い月はあたかも悪い出来事の予兆のようである。

七月十五,中元節這天,終於發生了事故。(中略)那晚熱得人發昏,天好

像讓火燒過了一般，一個大月亮也是泛紅的。〈孤戀花〉(p.158)

また、「台北人シリーズ」の〈滿天裏亮晶晶的星星〉にも「赤い月」が現されている。この物語は台湾の台北新公園に集まる同性愛者が主人公である。公園に集る皆から「教主」と呼ばれている主人公は昔大陸で俳優をしていたが、台湾に渡ってきてからは公園に屯する与太者となっていた。この教主がある晩泥酔して通行人の青年に執拗にからみ風紀違反で警察に捕まってしまう。公園から教主の姿が消えて久しくなっていた頃、その教主が再び公園に現れる夜が次のように描写されている。

黑沈沈的天空裏，那個月亮-----你見過嗎？你見過那樣淫邪的月亮嗎？像一團大肉球，充滿了血絲，肉紅肉紅的浮在那裏。〈滿天裏亮晶晶的星星〉(p.202)

「大きな肉の塊のように血の筋に満ちて薄気味悪い赤い色をして」浮かんでいる月、淫らな月が教主の登場を待ち構えている。文中にもあるが、ここで、月は「淫邪」（淫らさと邪悪さ）を表し、その後の物語の展開に不気味、不吉な印象を与えている。まさに風紀違反で捕まった教主が再登場するにふさわしい月の夜である。

この台北新公園に集まる男性同性愛者の物語は先に引用した長篇小説《孽子》に通じるものがあるとみられている。《孽子》は〈滿天裏亮晶晶的星星〉よりも登場人物がかなり多く、その関係も複雑であるが、主に四人の青年を中心に同性愛者が遭遇する諸々が描かれている。そこでも、月によって彼ら（同性愛者）の集まりの不気味さが演出されている。少し長いが引用する。

在我們這個王國，我們沒有尊卑，沒有貴賤，不分老少，不分強弱。我們共同有的，是一具具讓慾望焚煉得痛不可當的軀體，一顆顆寂寞得發瘋發狂的心。這一顆顆寂寞得發瘋發狂的心，到了午夜，如同一群衝破了牢籠的猛獸，張牙舞爪，開始四處猖獗的獵狩起來。在那團昏紅的月亮映照下，我們如同一群夢遊症的患者，一個踏著一個影子，開始狂熱的追逐，繞著那蓮花池，無休無止，輪迴下去，追逐我們那個巨大無比充滿了愛與慾的夢魘。〈孽子〉(p.26)

「薄暗い月の光に導かれ、我々はまるで一群の夢遊病者のように一人一人前を行く者の影を踏んで熱狂的な追求を始める。あの蓮池の周りを休

むことなく輪をなして回り続け、愛と欲に満ちたこの上なく巨大な我々の夢魔を追い求めるのであった。」⁽⁹⁾とあるように月は公園に屯する同性愛者の心を駆り立て、彼らを行動へと走らせるのである。夜の暗闇は身を潜めるには適しているが、その暗闇の中で行動を起こすには、何らかの明かりが必要なのだろう。そして、それは輝く「青白い月」ではだめで、猥雑さを含んだ「赤い月」の光でなければならないのかもしれない。同じく《孽子》から、「赤い月」が苦い過去の出来事を思い出させる場面を紹介する。次にあげるのは中心人物の一人阿青が同居人小玉の実家三重県を訪れて台北に帰る場面である。

我伸頭到車窗外回首望去,三重鎮那邊,燈火朦朧,淡水河也閃著點點的燈光。天上一片紅昏昏的月亮,懸在三重鎮那污黑的上空,模模糊糊。我突然記了起來,那次我帶弟娃到三重美麗華去看小東寶歌舞團表演,母親在臺上踢著腿子,她那塗滿了脂粉的臉上,竟是笑得那般吃力,那般痛苦。那晚我和弟娃乘公共汽車回臺北,走到臺北大橋上,弟娃伸出頭到車窗外,頻頻往三重那邊望去,我握住他的手、他的手心在發冷汗。

〈孽子〉(p.161)

年の離れた父と結婚した阿青の母は旅の役者と共に家を飛び出してしまふ。その母を三重まで弟と訪ねて、彼らが目にしたのは舞台の上で厚化粧をして無理に笑いながら踊っている母であった。そのとき弟と二人バスで三重県から台北に戻った。今、台北大橋から三重県を振り返り、その上空に浮かぶ「赤い月」によって弟と母を訪ねた苦い思い出が阿青の胸によみがえってきたのである。「赤い月」には性的な猥雑さだけではなく、個人の苦く苦しい思い出をよみがえらせる力もあるようである。

4.おわりに

題名に「月」が用いられている初期の二作品を手がかりに、後の作品も参照にしながら白先勇の作品における「月」のモチーフについてみてきた。既に言及したように「青白い月」「赤い月」に見られるように「性的な誘惑」「不穩の到来の予期」「苦い思い出の回想」というような新しい意味を「月」の描写に付け加えていることがわかった。特に、〈月夢〉は白先勇の同性愛をテーマとした初期の作品であるだけに、同性愛という狭いモ

チーフで語られることが多いような気がするが、白先勇が描こうとしていたのは、「青白い月」にしろ「赤い月」にしろ、人間の内面に潜む未知の部分が、或いは忘れ去られていた過去の部分が、月を媒介として引き出されうることである。更に言えば、月という自然が我々には理解できない不可思議な力を保持し、人間の内面に影響を与えうるということである。

ここでは触れることができなかったが、白先勇の作品には、月の他にも自然が重要な役割を果たしている作品が多いように思われる。人間に対峙する自然がどのように作品に取り入れられ、どのようなモチーフとされているか、今後の彼の作品考察の課題としたい。

〔付記〕本論は2007年7月14日、佛教大学中国言語文化研究会において口頭発表したものに考察を加えてまとめたものである。

【注釈】

- (1) 白先勇の作品の中で、国民党軍と共に中国大陸から台湾に渡ってきた人々の生きざまを描いた14の短篇作品をさす。本文中「台北人シリーズ」の作品の出典は全て《引用文献》の《台北人》によっている。
- (2) 〈月夢〉〈那晚的月光〉を含む初期作品の出典は全て《引用文献》の《寂寞的十七歳》によっている。
- (3) 作品発表当初〈畢業〉という題名で発表されたが、後に〈那晚的月光〉に改題された。
- (4) 聯合報に発表された〈小黃兒〉が処女作品であると紹介されているものもあるが、《文學雜誌》第五卷第五期(1958.9)に掲載された〈金大奶奶〉が正式な第一作と見られている。
- (5) 曾秀萍「〈〈現代文學〉〉創刊號的〈月夢〉不僅是他第一篇同志小說,也是戰後同志小說的破冰之作。」『孤臣・孽子・台北人』(p.83)
- (6) 聯合報2003.3.1-9連載。
- (7) 初出は《現代文學復刊》第一期(1977.7)。第一期から8回連載されるが、その後はシンカ^{*}ホールの新聞に掲載される。1983年、遠景出版社より《孽子》が出版。2003.年中央電視台で連続ドラマとして放映される。
- (8) 初出《現代文學》第二十三期、1965.2
- (9) 陳正醒(2006.4)『孽子』p34-p35

【引用文献】

白先勇《台北人》爾雅出版社

白先勇《寂寞的十七歲》允晨出版社

白先勇《孽子》允晨出版社